

この論文は、平成八年二月二十九日社団法人陶都有田青年会議所新聞『新しい風』第九十五号投稿原稿に加筆訂正をしたものである。



昭和59年10月16日お供日 修復された御輿を氏子総代役員が担って神社階段をお降りする

(一)お供日

「祭」の字は、会意文字で神前に捧げ物をすると云う意味です。また祭りに必ず出る「神輿」は、神様の車を皆の手で担ぎ上げる姿を表しています。

本物の祭りは、中心になる対象が必ずあるのです。奉り祀られてこそ初めて意義のあることなのです。

それではこれから、私が神明奉仕した経験により、有田のまつりについて、由

来・歴史・背景などに就いての考えを述べたいと思います。二十二年間の短い期間のことですから、知識・認識不足や間違いがあると承りますので、この記事を読まれた方は、感想・批判・助言を頂ければ、貴重なご意見として承ります。

(二)生活と祭

伊那那岐(いざなぎ)景気の後、やってきたのは平成五年の大水害で冷夏・大不作・米不足、翌六年の三七度を越える四〇日の日々に大干ばつ、更に七年の阪神淡路大震災、自然の前には為すすべを知らない。

古代の人は、もっと悲惨であつたらう。もちろん、昔ながらに治山治水事業もありました。縄文・弥生の頃、吉野ヶ里遺跡に祭祀跡があるように、後は神頼だつたらう。

太陽と水と大地の自然の恵みを感じ、祖先の恩を忘れないように日々、その祭りを絶やさなかつた。

八年の「世界ほのおの博覧会」で、有田主会場のサテライト会場に吉野ヶ里が選ばれました。古代と現代と共通する物を考えるいい機会でした。古代人の「太陽」と、有田の「火」を大事にする心等

々です。

日本国中に、いろいろの名の付く祭りは五万とある。そのうち思いつく有名なものは、京都八坂神社の祇園祭・時代祭、東北のねぶた等がある。

九州近郷では博多山傘、長崎諏訪神社のお供日、唐津神社の曳き山、伊万里神社のトンチントンがある。

また、一年の祭りも歳旦祭に始まり・初午祭・祈年祭・春期皇霊祭(願成就)・夏越祭・祇園祭・新嘗祭・秋期皇霊祭・例大祭、一年の決算として罪汚れを祓う大祓式がある。

有田町では、陶祖祭・夏祭り・山登りお供日・願成就・神待相撲・注連受渡神事がある。今回は「おくんち」について、私見ながら考察したいと思います。

何れの祭りも、その由来は、五穀豊稔を祈念する祭りがほとんどです。

日本の国を古人は言いました。「豊芦原瑞穂の国」と、大地に稲がたわわに実る豊かな美しい国という意味です。

食は職に通じ、生業は即、商売繁盛ということなのです。例えば、稲荷の神が、なぜ商売繁盛の神なのか。祭神は倉稲魂神です。イナリは、稲成がつつまつたともいわれ、本来農業の神で、時代に合つて職の神、商売の神になったのです。

(三)産業祭とお供の関係

四十二年前の昭和二十九年(一九五四)四月、有田町と東有田村とが町村合併し、ついで同三十一年、南川原地区が加わり有田町が誕生した。

以前からお供日は、経費・習慣・お花など神事担当町に負担が掛かり、改善の声があった。さらに、新町制になり神事町が十年に一回が五年毎廻ってくることに利益負担が大きくなった。

そこで、町村合併を契機として、同三十四年、従来の供日を廃止し、産業祭として出発した。

『有田町史』は、此の経緯を「基本的問題として、従来の供日は旧有田町の秋祭りであつて、新しい有田町となつた以上は、全町的な秋祭りが必要になつたことである。こつして昭和三十四年第一回の産業祭が実施されることになつた。十六日は御輿の巡行だけで、十七日は全町をあげて産業祭をくりひろげた。」(通史編三六九頁)と、記している。実は此の時に、「お供日と産業祭を切り離して考えたい」ことが、今に問題を残している。

その後、故青木類次有田町長と故岩尾新一有田商工会議所会頭は、全町のお供

日が出来ないものか試行錯誤なされました。しかし、そこには決定的な問題がありました、それは、各々の氏神様が異なることでした。すなはち、

- 一区く五区は、陶山神社・八阪神社
六区く九区は、椎谷神社
十区は南川良天満宮の氏神様なのです。

昭和五十八年、区長会は真剣に此の問題に取り組み、前向きに協力して頂きました。当時の区長は、(一区)池田重雄氏(二区)山口博氏(三区)手塚信雄氏(四区)古田實氏(五区)鈴木哲氏(六区)岡本正春氏(七区)西山義久氏(八区)大串正氏(九区)梶原貞信氏(十区)藤田忠弘氏です。

おまつり振興会や氏子総代会は、何時にも増して「有田全町の祭りにしたいと云う熱意が高まり」、幾度となくこの問題が協議検討されました。

真の意味で、有田町全町のお供日として、一区から十区まで神事町の注連が受け渡されるようになるためには、精神的に新旧有田町の意識の垣根が無くなり、同じ心で神祭りすることが必要です。理想的には陶山神社・八阪神社・椎谷神社・南川良天満宮の氏子が、お互いの神を奉斎して複合の氏子組織を作り上げることです。そうすれば、同じ神を祀る訳です



10月16日、9区神事町花組による奉納踊り

から、注連も問題なく十年周期に成るのです。

これは突拍子の説ではありません。現在、陶山神社と八阪神社は、同じ総代会で氏子も重複しています。本来は、白川を境として、陶山神社は、泉山から白川・赤絵町まで、八阪神社は、神古場・中の原・岩谷川内が氏子でした。

それが、明治三十一年(一八九八)有田町を横断する鉄道が開通するに際し、戸長役場を移転しなければならなかつた。そこで当時荒廃していた八阪神社の社務所に転用することとなつた。

このときの議会のことを『松本庄之助伝』(松本源次著一九四頁)に、当時元総

代で土地買収委員であつた松本庄之助は「八阪神社は陶山神社と共に有田町の村社ではないか。氏子が二区に限定されているとしても村社たることに変わりなく、また全町民が氏子になって宜しい。」と、言っている。これから以降、両社は併合されたい。

此の事例に依ると、今後、必要に迫られれば一区から十区までの有田町の総氏神として統合される可能性を秘めていると思われる。

話を先の区長会に戻しますが、現状で



10月17日、9区神事町星組による皿踊り

はそこまで急激には転換できないので、苦肉の策として登場したのが、各神社の神様を同じ御輿に御同座いただき、お供

日を一緒にするという案です。

具体的には、先ず、陶山神社のお供日と同じく、椎谷神社・南川良天満宮の祭典を新たに作り、「有田くんち」として、有田全体の祭りとなりました。

祭典のための御輿は、各神社個々に新造すると莫大な資金が要ります。また、全町一体の祭りとするのが主願ですから不都合です。

そこで、陶山神社の御輿(明治三年製)が、修復の時期も来ていたので、有田町全員の芳志により行い、「有田くんち」の意識をたかめようと考えました。

昭和五十九年から暫定的な方法ではありましたが、兎に角、新しい供日がスタートしました。神事町は一区から五区までは陶山神社を五年に一回、六区から九区までは椎谷神社を四年に一回、十区は南川良天満宮を毎年担当し、踊り町は従って二つの踊り町が出来ました。

この時の区長さん達は、お祭り振興会の中心的存在でした。それ以降、これ以上の案は進展せず。まだお供日と産業祭のあり方に疑問が残りました。

(四) 氏子合併入進展

「神事町注連元の歴史」の表を見ても判るように、昭和五十九年〜六十二年までは神事町と踊り町は一緒でしたが、六十三年度は椎谷神社神事町六区、踊り町十区となり、それ以降しが出てきた。このままでは、お供日当番町の意識が薄れ神事の意義も失われるという問題が浮上してきました。

ちょうど五年周期の三巡りの平成十年三月、五区と六区の境の時に、山口吉金

区長会長はじめ区長会で宮司がオプザーバ参加し、有田全町の祭りとして神事も踊りも同一の区で執り行うことが論議され、同じ氏神さまであれば神事町も一区から十区まで受け継ぐことが出来るのではないかとの結論に達した。

それを受けて役員会・氏子総代会の検討を経て、同年五月二十二日の合同氏子総代会で全会一致の賛同を頂き、氏子合併の調印式を行った。

十一月二十三日の注連受渡神事では、五区の注連元蒲地昭三氏から六区の川口

武彦氏に神事町と注連元が受け渡された。このときの両氏は商工会議所会頭から有田町町長に受け渡された形で、有田の「おくんち」の門出に光彩を添えました。ついで七区吉島信次氏、八区前田節明氏、九区益田正晴氏へと引き継がれ、平成十四年、十区の酒井田柿右衛門氏が注連元を受けられ、念願であった一区から十区までの有田町全体の祭りとなった。李參平公を始め先人陶工達の御魂達は「やっ」と有田の心が一つになったか」と喜ばれていると思います。

(五) お供日は有田焼産業発展の祭り

そもそも、有田供日は、何時・何故・何の為に起こったのか。祭日・起源の考察をしながら、「有田くんち」は、こうあって欲しいとの願いを書いて終わりにしたいと思います。

お供日は、周知の通り陶山神社の例祭です。

【由緒】

有田町の各部落には、天満宮・山の神の神や稲荷神社などの祠が数多くあります。夏祭りの「祇園さん」の数をみても、他地区に類をみません。古人は神社を必要としたからに他なりません。

陶山神社は、江戸時代まで「有田皿山宗廟八幡宮」と称されています。此の名称を分析すると、有田皿山代官が支配する処の神明帰一する天子を祀る八幡宮と云う意味で、何時の時代かに必要欠くべからざる神社として祀られたことが推測できます。

『皿山代官旧記覚書』の

Table with 2 columns: 年度, 陶山神社神事町注連元名 (踊り町と一緒)

有田町全体の祭りにする暫定の神事町・踊り町担当の流れ

Table with 5 columns: 年度, 陶山・八阪神社 (神事町, 踊り町), 椎谷神社 (神事町, 踊り町), 南川良天満宮

平成10年5月22日、陶山・八阪・椎谷神社の氏子合併により、神事町と踊り町が1区から9区まで受け継ぐこととなった。更に、平成13年11月から南川良天満宮の注連も共に受け渡すことが氏子総代会で決議された。

Table with 2 columns: 年度, 氏子総代会で決議された注連元名

氏子合併の調印

昭和二十九年に有田町と東有田町が合併してから、今年四十四年になる。新制有田町が誕生して以来、神事町にも有田町全町の祭りと為すために、三十四年、従来のお供日を廃止して産業祭りに行った。

次いで五十八年、区長会を中心に二区から十区までの全町民に浄財を募り、陶山神社の御神輿を修復した。その御神輿に陶山神社・椎谷神社・南川良天満宮のご神体を奉斎して、有田町すべての地区を渡御する神幸行事を行い、形態上は全町的になってきた。しかし、氏神様が違つていつて神事町の注連受け渡しが五区から六区に渡らなかつた。

平成十年三月の区長会で、この件が前向きに検討された。全町民が「同じ氏神様をまつる」ようにすればその垣根が無くなる。百年前の明治三十一年に陶山神社と八阪神社の氏子が合併した例があり、お互いに氏子になり合えば問題ないとの「氏子合併」の案が浮上した。

本日、度重なる陶山神社・八阪神社と椎谷神社の氏子総代会議を経て、氏子合併が実現することとなった。これからは、陶山神社・八阪神社・椎谷神社の神様を分け隔てなくお祀りし、世界に誇れる「有田のお供日」を推し進め、有田の発展に務めようとする。

平成十年五月二十二日
陶山神社八阪神社 氏子総代会長 山口忠太 印
椎谷神社 氏子総代会長 梶原太郎 印
宮司 富田清登 印

右 氏子合併の調印式の原文

宝暦八年(一七五八)八月の条に「有田皿山宗廟八幡宮勧請以来、当年百々に当たるに依つて、来る八月十五日の祭礼に、氏子中より浮立三囃子興業を願ひ出でたる。」これに依り百年遡ると万治元年(一六五八)に当たり、創建の時点が判

明しました。古者によれば伊万里市二里町の大有田郷の八幡宮から御分霊を戴いて、現在の場所に奉斎されたといわれています。この頃の有田町の主要歴史を、見てみると

元和二年(一六一六)李三平公が、泉山にて白磁石を発見し、白川天狗谷で磁器の焼成に成功。

寛永十二年(一六三五)皿山内の窯場一三ヶ所、窯元一五〇戸と定めらる。正保四年(一六四七)柿右衛門、赤絵を創始。

慶安三年(一六五〇)初めて日本陶磁一四五個が長崎から輸出。万治二年(一六五九)オランダ商館がモ力向け磁器五万六千七百個の焼成契約。

焼成に成功してから、わずか四十年で海外に輸出するまで技術を向上させ体制を作り上げたのです。李三平公と陶工達の並々な努力が想像できます。

この頃に、陶祖の神として鎮座されたのです。では、何の契機により創建されたか検証しましょう。

有田に於いて大事件が起こります、龍泉寺過去帳に「月窓浄心上白川三兵衛明暦元年(一六五五)乙未八月十一日」とあり、李三平公が亡くなりました。陶

山神社は応神天皇を祀る「八幡宮」です。しかし、没後わずか三年後に、陶山神社が創建されたことは、公と深い関わりがあるとして解釈するほうが自然です。公は「金ケ江」の姓を名乗ることが許され、佐賀藩から手厚い庇護を受けていた。

陶工達の長として、陶磁器の発展の功労者で中心的存在であった主を慕った人々は嘆き悲しみ、その御霊を何処かに奉斎した。それは他ならず陶山神社であり、主神の応神天皇と共に、脇殿の神として鍋島直茂公と李三平公を併せ祀ったのだと思います。

祭祀について皿山氏子中・庄屋中・別当中の願ひ書の『皿山代官旧記覚書』文化六年(一八〇九)の条に、「この祭礼は、鍋島直茂公が朝鮮より帰陣の折り、召し連れた者共、この地において陶器焼きを始めた元祖に報恩のため窯焼中が祭つていた事を老人達より聞いているが、先年大凶年の折り、皿山中大変零落し、方々に離散し退転した。これは、これまで元祖の祭りを疎かにしたために困窮し、窯

焼き自然と山中一統不景気になった事は嘆かわしい、だから山中陶器繁盛の祈念のため、また陶工相始めた開祖の神を以前の通り祭りたい。」とあり、この祭礼の意義が明確に記されている。

【祭日】

創建以来八月十五日に行われていた。天保八年(一八三七)九月十三日付、皿山代官達、「伊万里・有田両所とも、神事祭礼の件来る二十三日一同に相決められ候」とあり、九月二十三日に変更された。これが明治六年(一八七四)太陰暦から太陽暦に改暦されて、現在の十月十六・十七日になった。

元来の祭日は、李三平公の命日の八月十一日、わずか四日しか離れていない、偶然であろうか?

まさにこの祭りは、公の年忌のまつりであることは、誰でも異論は無いと思う。そこで私の提案として、同じく有田焼産業発展を目的とする供日と区別する必要はなく、また有田お供日、陶祖まつり、と名称を換えたいと思ひます。参加する人も、見る人も、祭る対象がで、意義目的が明確になります。また対外的にも名前を聞いただけでその祭りの内容が分かり易いと思ひます。

文責 宮司 富田清登